

# 東日本大震災被災者の生活復興感における生活復興7要素モデルの 検証：名取市現況調査のデータをもとに

Seven Critical Element Model of Life Recovery in the Great East Japan Earthquake:  
Based on the Natori city Survey Data

松川 杏寧<sup>1</sup>，佐藤 翔輔<sup>2</sup>，立木 茂雄<sup>3</sup>

Anna MATSUKAWA<sup>1</sup>，Shosuke SATO<sup>2</sup> and Shigeo TATSUKI<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 同志社大学 研究開発推進機構

Organization for Research Initiatives and Development, Doshisha University.

<sup>2</sup> 東北大学災害科学国際研究所

IRIDeS, Tohoku University.

<sup>3</sup> 同志社大学 社会学部

Department of Sociology, Doshisha University.

The purpose of this paper is to verify how the seven element model can explain the life recovery of the Great East Japan Earthquake. The sample consists of 3,513 people from 1,533 households. They are temporary dwellers in Natori City, Miyagi. The collection rate of household's slip is 72.2%, and individual slip is 56.1%. In this paper, general linear model is used to analyze the data.

**Keywords :** seven critical element model, life recovery, the great east japan earthquake, general linear model

## 1. はじめに

### (1) 問題背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、岩手・宮城・福島を中心とする複数の都道府県に跨る広い範囲に被害を及ぼした。被害程度も多様であり、現在の復興の進み具合も地域ごとに差が見られる。例え同じ地域の被災者であっても、個人の持つ属性や特徴によって一人ひとりが感じる復興の進み具合は千差万別である。この個人が感じる生活再建の進み具合、生活復興感について、これまでも様々な研究が進められてきた。黒宮(2012)<sup>1)</sup>は阪神・淡路大震災以降の生活再建、生活復興に関する研究をもとに、被災者個人の生活再建を「被災者の『生活』，『くらし』を再建していく過程（プロセス）そのもの」（黒宮 2012: 9）と定義した。では現在、東日本大震災の被災地で行われている被災者個人の生活再建は、どのように進められているのであろうか。

### (2) 先行研究

生活再建の研究について黒宮(2012)<sup>1)</sup>は、「被災者個々の復興やその程度を『はかる』道具」（黒宮 2012: 9）と、「その『復興感』にどのような社会的変数が影響を与えているのかを解き明かすこと」（黒宮 2012: 9）が必要であると述べている。この〈復興感〉は、時代ごとに異なる捉え方をされており、それぞれの時代で異なった視点から研究されている。特に阪神・淡路大震災以降は、個人のくらしの再生という新しい視点が生まれた。本研究では、この阪神・淡路大震災を契機に始まった「個人の生活の再建」に着目して、東日本大震災の被災地を捉える。

これまでの研究から得られた、個人の生活再建における基本モデルの一つが〈生活再建 7 要素モデル〉である<sup>2)</sup>。この 7 要素とは、1)すまい、2)人と人とのつながり、3)まち、4)こころとからだ、5)そなえ、6)くらしむき、7)

行政とのかかわり、の 7 つである。被災者の生活再建に必要なニーズは基本的にこの 7 つであり、生活再建の進捗状況によって必要な要素の比重が変動するのである<sup>3)</sup>。このモデルは、阪神・淡路大震災 5 年目に行われた復興検証の市民ワークショップからスタートした一連の研究によって生まれたものである<sup>4,5)</sup>。この〈生活再建 7 要素モデル〉が代表する阪神・淡路大震災以降の復興感研究の特徴は、すまいやライフライン、インフラといったハード面の要因だけでなく、人と人とのつながりや行政とのかかわりといったソフト面の要因の重要性が指摘されている点である。

この〈生活再建 7 要素モデル〉研究に倣い、2013 年 1 月 27 日に宮城県名取市で被災市民 31 名にご参加いただき、被災者ワークショップが行われた（松川・辻岡・立木 2015）<sup>6)</sup>。その結果、名取市の被災者からも〈生活再建 7 要素モデル〉と非常に親和性の高い成果物が得られた。また、東日本大震災で特徴的となった借り上げ仮設居住者を含む 4 つのすまい方（プレハブ仮設入居者、借り上げ仮設入居者、在宅、再建済み）の違いによって、必要なニーズの重要度が違うことも明らかとなった。

### (3) 目的と意義

本研究では、この名取市での成果および阪神・淡路大震災以降の個人の生活再建に関する研究の知見を用いて、東日本大震災被災者の生活復興感がどの程度説明できるのかを明らかにする。そのために、名取市で被災した全市民を対象に計量調査を行う。このデータを分析することによって、今度の被災者の生活再建支援に重要な要因が明らかにできるだけでなく、〈生活再建 7 要素モデル〉の普遍性、再現性を検討できる。

表1 質問項目一覧

単位	生活再建7要素	Q	付番	内容	変数化の方法
世帯	すまい	Q6		民賃借上げ仮設住宅への入居時期	
	すまい	Q7		民賃借上げ仮設住宅の見つけ方	
	すまい	Q8		民賃借上げ仮設住宅の住まいの状況	
	くらしむき	Q1	①	収入の増減	
	くらしむき		②	支出の増減	
	くらしむき		③	預貯金の増減	
	くらしむき		④	ローン・負債の増減	
	くらしむき	Q2		主たる世帯の収入源	
	くらしむき	Q3		家計の収支に対する満足度	
	くらしむき	Q4		地震保険への加入（震災時）	
	こころとからだ	Q5	①	健康（体の病気）が心配な人がいるか	
	こころとからだ		②	健康（心の病気）が心配な人がいるか	
	こころとからだ		③	仕事していない人がいるか	
	こころとからだ		④	その他の問題がある人がいるか	
個人				性別	カテゴリ化
				年代	
	すまい	Q1		住まいの方針は決まっているか	
	すまい	Q2	①	今後のあなたの住まいの種類	
	すまい	Q2	②	転居希望年月	
	すまい	Q2	②	決まっていない理由	
	すまい	Q2	③	住まいの場所	
	すまい	Q2	④	再建後の世帯構成	
	すまい	Q3		住まいの方針を決める上で、気がかりになること	
	すまい	Q4		住まいの再建を考えるうえで、重要だと思うこと	
	つながり	Q6	①	震災前：世間話をする近所・親類・職場（学校）の人数	カテゴリ化
	つながり	Q6	①	現在：世間話をする近所・親類・職場（学校）の人数	カテゴリ化
	つながり	Q6	②	震災間：趣味やサークルで普段顔を合わせる人数	カテゴリ化
	つながり	Q6	②	現在：趣味やサークルで普段顔を合わせる人数	カテゴリ化
	つながり	Q14		集会所やサロンのイベントへの参加	
	まち	Q7		現在住んでいるまちの様子	
	こころとからだ	Q9	①	寂しい気持ちになる	主成分分析
	こころとからだ	Q9	②	気分が沈む	
	こころとからだ	Q9	③	次々とよくないことを考える	
	こころとからだ	Q9	④	動悸（どき）がする	
	こころとからだ	Q9	⑤	息切れがする	
	こころとからだ	Q9	⑥	胸がしめつけられるような痛みがある	
	こころとからだ	Q10	①	健康状態	
	こころとからだ	Q10	②	症状	
	こころとからだ	Q10	③	医者にかかっているか	
	くらしむき	Q11		震災前の主たるご職業	
	くらしむき	Q12		現在の主たるご職業	
	行政とのかかわり	Q5	①	「広報なとり」を読んでいる	
	行政とのかかわり	Q5	②	「名取市復興だより」を読んでいる	
	行政とのかかわり	Q5	③	「なとらじ（災害FM）」を聞いている	
	行政とのかかわり	Q5	④	「福幸さんちのつぶや記（ブログ）」を読んでいる	
	行政とのかかわり	Q8	①	ゴミ出しのルールが守られないときの考え	
	行政とのかかわり	Q8	②	まちづくりをすすめるときの考え方	
	行政とのかかわり	Q8	③	自治会活動をおこなうときの考え方	
	行政とのかかわり	Q13		支援員による訪問の考え方	
	復興過程感：できごと評価	Q17	①	今度の生活のめど	足し合わせ
	復興過程感：できごと評価	Q17	②	生きることへの意味の自覚	
	復興過程感：重要他者との	Q17	③	人生を変える出会い	
	復興過程感：重要他者との	Q17	④	家族や親族、友人の大切さを見直した	
	生活復興感：生活充実度	Q15	①	忙しく活動的な生活を送ることは	
	生活復興感：生活充実度	Q15	②	自分のしていることに生きがいを感じることは	
	生活復興感：生活充実度	Q15	③	まわりの人びととうまくつきあっていくことは	
	生活復興感：生活充実度	Q15	④	日常生活を楽しむことは	
	生活復興感：生活充実度	Q15	⑤	自分の将来は明るいと感じることは	
	生活復興感：生活充実度	Q15	⑥	元気でばつらつとしていることは	
	生活復興感：生活充実度	Q15	⑦	家で過ごす時間は	
	生活復興感：生活満足度	Q15	①	仕事の量は	
	生活復興感：生活満足度	Q16	②	毎日のくらしに	
	生活復興感：生活満足度	Q16	③	ご自分の健康に	
	生活復興感：生活満足度	Q16	④	今の人間関係に	
	生活復興感：生活満足度	Q16	⑤	今の家計の状態に	
	生活復興感：生活満足度	Q16	⑥	今の家庭生活に	
	生活復興感：生活満足度	Q16	⑦	ご自分の仕事に	
	生活復興感	Q18		1年度のあなたの生活はどうなっているか	

## 2. 方法

### (1) 調査概要

本研究が用いるデータは、2015年1月から2月に実施された「名取市現況調査」のデータである。この調査は、名取で被災した世帯もしくは震災がきっかけで名取市に居住している世帯のうち、まだ仮住まい中として名取市が把握しているすべての被災者（1,533世帯、3,513名）を対象に行われた全数調査である。回収率は世帯票が72.2%、個人票が56.1%であった（世帯票と個人票については、次の節で詳しく述べる）。

### (2) 用具

質問紙はプレハブ仮設入居者用と借り上げ仮設入居者用の2パターン用意し、世帯ごとに世帯全体の状況（世

帯全体の家計など）について問う世帯票と、世帯内の各個人の状況や考えを問う個人票の2種類の質問紙を用意した。

また質問項目は、前述の名取市被災者ワークショップの結果と、神戸市復興調査の項目をもとに作成した。

### (3) 分析方法

まずは変数の作成についてであるが、得られたデータのうち、年齢や顔合わせする人数といった連続変数はカテゴリ化し、心身のストレスや生活復興感といった複数項目を一つの変数として扱いたいものは得点の合算や主成分分析を行い変数化した。

その後得られた変数を用いて重回帰分析を行った。本研究は名取市現況調査データについて、基礎的な分析を行い、データから得られる情報をつぶさに確認することをめざしている。詳しい手順としては、まず各質問項目を説明変数とし、合算で作成した生活復興感変数を従属変数として重回帰分析を行った。次に、7要素のうちの同じ要素に分類される項目を集めて説明変数とし、生活復興感変数を従属変数として重回帰分析を行った。この2つの結果から、10%水準で有意な結果が得られた変数を選出し、選出されたすべての変数を説明変数とし、生活復興感変数を従属変数として重回帰分析を行った。そこからさらに有意でない変数を削除し、モデルの検討を行った。

## 3. 結果

分析の結果が表2と表3である。まず全体的な結果を見ていくと、モデルそのものの調整済みR<sup>2</sup>値は.556であり、このモデルで説明できるデータの分散は5割を超えていた。モデルには最終的に10%水準で有意な変数までを許容範囲として投入した。表1から分かるように、元々7要素のうちの「そなえ」に関する項目のみ質問項目に含まれていなかったが、「行政とのかかわり」に関する項目も分析の過程で非有意となったため、最終モデルでは7要素のうち1)すまい、2)人と人とのつながり、3)まち、4)こころとからだ、5)くらしむきの5つに関する変数が用いられている。これらの残った説明変数のうち、

表 2 生活復興感を従属変数とした重回帰分析結果

ソース	項目	タイプ	II	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	偏イータ	2 乗
修正モデル				34491.018 <sup>a</sup>	53	650.774	17.910	.000		.589
切片				76309.804	1	76309.804	2100.144	.000		.760
すまい	住まいの方針を決める上で、気がかりになること：住宅ローンダミー			324.379	1	324.379	8.927	.003		.013
	住まいの方針を決める上で、気がかりになること：家賃ダミー			98.612	1	98.612	2.714	.100		.004
	住まいの方針を決める上で、気がかりになること：災害公営住宅の申し込み方法ダミー			143.991	1	143.991	3.963	.047		.006
つながり	ご近所づきあいについて：世間話をする近所・親類・職場（学校）の人数（震災前）			1159.012	4	289.753	7.974	.000		.046
	ご近所づきあいについて：世間話をする近所・親類・職場（学校）の人数（現在）			1431.024	4	357.756	9.846	.000		.056
まち	あなたが現在住んでいるまちは、どんな様子ですか			1015.321	3	338.440	9.314	.000		.041
こころとからだ	心身ストレス尺度			2020.808	1	2020.808	55.615	.000		.078
	問 10. 健康状態			737.203	2	368.602	10.144	.000		.030
くらしむき	家計のやりくり：収入			529.171	2	264.585	7.282	.001		.022
	現在の家計の収支について			454.777	4	113.694	3.129	.014		.019
	震災前の主たるご職業			1942.769	9	215.863	5.941	.000		.075
	震災後の主たるご職業			1933.893	9	214.877	5.914	.000		.074
復興過程感	問 17. 4年間の体験や変化：①くらしのめど			766.256	4	191.564	5.272	.000		.031
	問 17. 4年間の体験や変化：②「生きることの意味			983.827	4	245.957	6.769	.000		.039
	問 17. 4年間の体験や変化：③人生を変える出会い			1601.722	4	400.431	11.020	.000		.062
誤差				24054.111	662	36.336				
総和				1211838.000	716					
修正総和				58545.128	715					

R2 乗 = .589 (調整済み R2 乗 = .556)

もっとも生活復興感への寄与率が高いのは、心身ストレス尺度であった（ $\eta^2=.078$ ）。その次に震災前（ $\eta^2=.075$ ）および震災後の職業（ $\eta^2=.074$ ）、そして震災後 4 年間で的人生を変える出会い（ $\eta^2=.062$ ）が続く、ご近所で世間話をする人数（震災後の人数： $\eta^2=.056$ 、震災前の人数： $\eta^2=.046$ ）となっている。

次に表 3 にある各項目の選択しとその  $\beta$  係数をもとに、検討する。まず「すまい」についてであるが、住まいの再建方針を決める上での気がかりについて、住宅ローンを組めるのかということと、家賃がいくらになるか分からないに対しては正の効果も、逆に災害公営住宅の申し込み方法が分からないに対しては負の効果も確認された。これは、住宅ローンや家賃の心配をする人はすでにすまいの再建にはある程度のめどが立っているため生活復興感に対して正の効果があるが、災害公営住宅の申し込み方法が分からないということはまだすまいの再建が進んでおらず、それゆえに生活復興感を低下させる効果を持っていると考えられる。

次に「つながり」についてであるが、震災後は世間話をする人の数が少ない人ほど生活復興感に負の効果を持っていることがわかった。しかし、震災前の人数をみると逆のことが起こっており、世間話をする人の数が少ないほど、生活復興感に対してより強い正の効果を持っていた。このことから、人数そのものより震災前と震災後の人数の変化などによる影響を考慮する必要があるのではないかと推察される。

続いて「まち」であるが、住人同士の付き合いが少ないまちは生活復興感に対してより強い負の効果を持っていることが確認された。この結果は「つながり」に関する項目の結果とも一部整合性を持っている。「つながり」項目を個人間でのソーシャルキャピタルとしてみるなら、この「まち」項目は地域にある公共財としてのソーシャルキャピタルが、生活復興感を高める効果があると考えられる。

次に「こころとからだ」であるが、心身のストレスが高いほど生活復興感に対して負の効果を持ち、個人が健康であることが生活復興感に対して正の効果を持っていることが確認された。心身ともに健康であれば、それだけでも生活復興感が高められるということである。

次は「くらしむき」についてである。家計の収入が増えることは生活復興感に対して正の効果を持ち、現在の家計の収支について満足していればしているほど生活復興感に対して正の効果を持っていることが確認された。職業についてみると、震災前の職業は学生以外すべて生活復興感に対して負の効果を持ち、震災後の職業では団体職員以外すべて生活復興感に対して正の効果もっている。このことから震災前はどうかであれ、震災後何かしらの職業につき、家計の収支にある程度満足できる状況であることは、生活復興感を高めることが明らかになった。

最後に復興過程感である。これらの項目は、先行研究では生活再建 7 要素と生活復興感の間にある媒介変数である。本研究では復興過程感も生活復興感に対する一つの説明変数として捉え、分析に投入した。まず「くらしのめどがたっているか」という項目について、めどがたっていないかと思っているほど生活復興感に対して負の効果を持っていた。「生きることに意味がある」と感じるかどうかについては、感じていないほど生活復興感に対して負の効果を持っていた。「人生を変える出会い」について、当てはまらない場合ほど生活復興感に対して負の効果を持っていた。

#### 4. おわりに

本稿で行った分析により、東日本大震災の被災地における生活再建でも、これまでの復興研究で得られた〈生活再建 7 要素モデル〉を用いて説明することができるという可能性を見出すことができた。すでに存在しているモデルを用いることができるのであれば、現在再建の途上である東日本大震災の被災地で、よりスムーズに生活再建を進められるよう後押しができると考える。

今回の分析では、心身ストレスと生活復興感以外の項目は、調査票の質問項目のまま分析に投入した。しかし生活復興感に寄与する要因は先行研究でも複雑に関係していることが示唆されており、今後より高度な変数化および分析を行う必要があると考える。それにより、今回の分析でモデルから落ちてしまった変数を拾い上げ、より精度の高い分析を行うことができるのではないかと

表3 重回帰分析結果：パラメータ推定値

パラメータ 切片	項目	B	標準誤差	t 値	有意確率	偏イータ 2 乗
すまい	住まいの方針を決める上で、気がかりになること：住宅ローンダミー	2.013	.674	2.988	.003	.013
	住まいの方針を決める上で、気がかりになること：家賃ダミー	.932	.566	1.647	.100	.004
	住まいの方針を決める上で、気がかりになること：災害公営住宅の申し込み方法ダミー	-1.831	.920	-1.991	.047	.006
つながり	ご近所づきあいについて：世間話をする近所・親類・職場（学校）の人数（震災前）	6.424	1.426	4.505	.000	.030
	6～10人	4.589	1.390	3.302	.001	.016
	11～20人（十数人・複数人含む）	3.898	1.399	2.787	.005	.012
	21～99人（数十人・だいたい等含む）	2.130	1.355	1.572	.116	.004
	100人以上（たくさん・多数含む）	0 <sup>a</sup>				
	ご近所づきあいについて：世間話をする近所・親類・職場（学校）の人数（現在）	-7.744	1.967	-3.937	.000	.023
	6～10人	-6.203	1.957	-3.170	.002	.015
	11～20人（十数人・複数人含む）	-3.649	1.989	-1.834	.067	.005
	21～99人（数十人・だいたい等含む）	-2.625	2.008	-1.307	.192	.003
	100人以上（たくさん・多数含む）	0 <sup>a</sup>				
まち	あなたが現在住んでいるまちは、どんな様子ですか	-4.587	.896	-5.118	.000	.038
	まちのつきあいはあまりなく、それぞれで生活している	-4.656	1.052	-4.426	.000	.029
	まちのつきあいはあまりないが、地域の世話役の人たちの活動が目にはいる	-3.563	.893	-3.990	.000	.023
	まちのつきあいは少しあり、住民がお互いに挨拶をかわすこともある	0 <sup>a</sup>				
	まちのつきあいはかなりあり、何かのときには多くの人々が参加する	0 <sup>a</sup>				
こころとからだ	心身ストレス尺度	-2.170	.291	-7.458	.000	.078
	問10. 健康状態	4.396	.998	4.407	.000	.028
	良い	1.943	.767	2.534	.012	.010
	ふつう	0 <sup>a</sup>				
	悪い	0 <sup>a</sup>				
くらしむき	家計のやりくり：収入	2.290	.979	2.338	.020	.008
	増えた	-1.199	.559	-2.145	.032	.007
	減った	0 <sup>a</sup>				
	変わらない	5.842	2.195	2.661	.008	.011
	満足している	2.805	1.760	1.593	.112	.004
	なんとか暮らしていける	1.730	1.770	.978	.329	.001
	心配である	1.149	2.002	.574	.566	.000
	暮らしていけない	0 <sup>a</sup>				
	よくわからない	-4.573	2.064	-2.215	.027	.007
	震災前の主たるご職業	-5.901	1.743	-3.386	.001	.017
	農漁業	-.326	1.653	-.197	.844	.000
	自営業	-2.345	1.567	-1.496	.135	.003
	会社員（事務）	1.189	2.449	.486	.627	.000
	会社員（労務）	-6.675	2.435	-2.741	.006	.011
	団体職員	-1.445	1.500	-.964	.335	.001
	公務員	3.915	2.044	1.915	.056	.006
	パート・アルバイト	-.030	1.460	-.020	.984	.000
	学生	0 <sup>a</sup>				
	無職（退職者を含む）	6.919	2.664	2.597	.010	.010
	震災後の主たるご職業	7.644	1.870	4.087	.000	.025
	農漁業	2.121	1.634	1.299	.195	.003
	自営業	4.656	1.539	3.025	.003	.014
	会社員（事務）	-.165	2.721	-.061	.952	.000
	会社員（労務）	7.257	2.674	2.714	.007	.011
	団体職員	3.582	1.418	2.526	.012	.010
	公務員	.048	2.484	.019	.985	.000
	パート・アルバイト	.683	1.340	.510	.610	.000
	学生	0 <sup>a</sup>				
	無職（退職者を含む）	0 <sup>a</sup>				
	その他	0 <sup>a</sup>				
復興過程感	問17. 4年間の体験や変化：①くらしのめど	-4.480	1.348	-3.324	.001	.016
	まったくそう思わない	-2.144	1.380	-1.553	.121	.004
	どちらかといえばそう思わない	-1.759	1.246	-1.412	.158	.003
	どちらともいえない	-1.053	1.280	-.822	.411	.001
	どちらかといえばそう思う	0 <sup>a</sup>				
	まったくそう思う	-5.596	1.547	-3.616	.000	.019
	問17. 4年間の体験や変化：②「生きる」の意味	-5.052	1.105	-4.574	.000	.031
	まったくそう思わない	-2.295	.752	-3.053	.002	.014
	どちらかといえばそう思わない	-1.532	.737	-2.079	.038	.006
	どちらともいえない	0 <sup>a</sup>				
	どちらかといえばそう思う	-5.859	1.163	-5.036	.000	.037
	まったくそう思う	-3.665	1.204	-3.045	.002	.014
	問17. 4年間の体験や変化：③人生を変える出会い	-2.355	1.074	-2.194	.029	.007
	まったく当てはまらない	-1.136	1.152	-.985	.325	.001
	どちらかといえば当てはまらない	0 <sup>a</sup>				
	どちらともいえない	0 <sup>a</sup>				
	どちらかといえば当てはまる	0 <sup>a</sup>				
	とてもよく当てはまる	0 <sup>a</sup>				

考える。そこで次のステップとして、今回の分析結果を基盤に変数化を行い、共分散構造分析などの手法を用いつつ分析を進めて行きたい。

## 謝辞

本研究は（独）科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）による研究成果の一部である。

## 参考文献

- 1) 黒宮亜希子, 2012, 「被災者の生活復興に関する社会学的研究～生活復興感とその規定因の探索～」同志社大学大学院文学研究科 2012 年度博士論文。
- 2) 復興の教科書, 2014, 「復興のモデル」, 復興の教科書, (2014 年 5 月 5 日, <http://fukko.org/model/>) 。

- 3) 立木茂雄, 2014 「生活を再建するとは、どういうことか？」『住民行政の窓』397, 7-22.
- 4) 田村圭子・林春男・立木茂雄・木村玲欧・野田隆・矢守克也, 2003, 「阪神・淡路大震災の被災地における家計の変化—2003 年生活復興調査報告—」『地域安全学会論文集』5, 地域安全学会, 227-236.
- 5) 立木茂雄・林春男・矢守克也・野田隆・田村圭子・木村玲欧, 2004, 「阪神・淡路大震災被災者の長期的な生活復興過程のモデル化とその検証：2003 年兵庫県復興調査データへの構造方程式モデリング（SEM）の適用」『地域安全学会論文集』6, 地域安全学会, 261-267.
- 6) 松川杏寧・辻岡綾・立木茂雄, 2015, 「すまい方別に見る被災者の生活再建過程の現状とその課題 —宮城県名取市での被災者ワークショップのデータをもとに—」『地域安全学会論文集』25, 地域安全学会, [PDF Only].